

「底が突き抜けた」時代の歩き方 594

沖縄戦「集団自決」は回避された本土戦の惨劇そのものではなかったか

「その土地に足を踏み入れる」ということは、どういうことだろう。どのようであったなら、その土地に足を踏み入れたことになるのか。沖縄についてこのことを改めて考えてみたい。沖縄に飛行機で飛んで座間味島にやっけてきて、泳いだり、スキューバダイビングをしたり、ホエールウォッチングして、2、3日間を楽しく過ごして帰っていく。このツアーが「その土地に足を踏み入れる」ことでもなんでもなく、素通りに等しいことはいうまでもない。観光客は本来「その土地に足を踏み入れる」ためではなく、遊びや観光を楽しむためにやってくるからだ。それでも彼らは沖縄に行ったと思っている。「ちゅらさん」や「Dr. コトー診療所」「瑠璃の島」など、テレビドラマで見知っている舞台を訪れた感じになるし、安室奈美恵や宮里藍などのスターが誕生した地を訪れた気分になっている。

観光とはそういうものだし、そのような気分で成り立っているから、そんな彼らにむかって、あなたがたは本当の沖縄を知らないままである、などと正面切って詰つてもなんの意味もない。沖縄自体、観光の島、「癒し」の島として売りに出され、人々は風光明媚な島としてのみ関心をもって訪れるからだ。しかし、沖縄を観光面でのみ捉えることは、観光客自身の生活もまた、観光化されていることを物語っている筈である。沖縄に限らず、ある場所を観光面で切り取ることは、観光面でその場所の実相を隠蔽するに等しい。どの場所での生活も、見えてこないところに深く沈んでいるからだ。立ち止まって凝視するところに、見ようとするものがおぼろげに姿を垣間見せつつあるにちがいない。観光は立ち止まらず、見ず、迫らず、つまり、生存の風化にほかならないのだ。

作家目取真俊と沖縄女性史家宮城晴美が、対談〈終わらない「集団自決」と、「文学」の課題〉(『すばる』07. 2)を行っており、そのなかで目取真俊が次のように語っている。「今の社会には、物事を単純化して、わかりやすく軽くしていこうという傾向がある。文学でも、映画でもそうです。とにかくわかりやすさが求められ、ストーリーも言葉も単純化されていって、最終的には二者択一的なところまで押し込められてしまう。ところが起こった現実はそのじゃない。ものすごく重いし、複雑だし、多様な要素がある。だから重いものを重いまま、複雑なものを複雑なまま、どれだけ捉えきって描ききれるかが大切なんです。

去年、ひめゆり学徒の体験談が退屈云々という話が出ましたけどね、面白いわけがないんですよ、戦争の話が。戦争の残酷さ、無惨さを生々しく伝えれば、聞いた後に感動

するとかそんな生やさしいものではなく、後にトラウマとして残りかねないものなんです。そういう重くて複雑なものを、そのまま受け止めていけるだけの心の強さを作っていくことが、私は大切だと思うんです。“面白い”とか“美しい”とか、そんなものじゃないんですよ。そういったふうにしか受け付けられないような心になっていったときに、もう一回美しい死として、国のために自ら命を絶つような愚かなことが起こると思いますよ。」

この「ひめゆり学徒の体験談が退屈云々という話」については、次の註が付されている。《戦争末期、県立第一高等女学校と沖縄師範学校女子部の生徒たちが看護要員として動員され（「ひめゆり学徒隊」）、多数が犠牲となる。生き残った人の一部は、沖縄を訪れた修学旅行生に自らの体験を語る活動をしているが、05年、東京の私立高校が入学試験の際、「体験談を聞いたある生徒の感想文」（英文）を英語のテストで出題。そこには体験談が「退屈で、飽きてしまった」などの内容が書かれていた。「感想文」はテスト作成者の創作との報道もあるが、戦争体験に対する現代人の共感性低下を象徴する出来事として、各方面に波紋を広げた。》

観光に比重が置かれている修学旅行生にとって、戦争体験が「退屈で、飽きてしまった」のは、当然のことといわねばならない。この問題はしたがって、《戦争体験に対する現代人の共感性低下を象徴する出来事》として受けとめられるべきではない。それ以前の問題であるからだ。そこでは聞き手の修学旅行生が、「ひめゆり学徒の体験談」をどのように聞こうとしていたか、その姿勢のかたちづくられかたがなによりもまず問われなくてはならない。つまり、体験談は聞けば伝わるものではないし、身につくものでもない。いいかえると、体験談の語り手のいる場所と聞き手のいる場所とがどこかで交差しなければ、体験談が伝わる筈がないし、「退屈で、飽きてしまった」ものにならざるをえない。目取真俊が言うように、体験談が「面白いわけがない」し、もし体験談を真正面から受けとめるなら、「戦争の残酷さ、無残さ」は、「聞いた後に感動するとかそんな生やさしいものではなく、後にトラウマとして残りかねないもの」なのである。

彼は「生々しく伝えれば」というように、「伝わる」ことを前提として問題にアプローチしているが、「伝わらない」ことを前提にしないかぎり、真の問題はみえてこないと思う。言葉が伝わることを信じて小説を書いている彼は、戦争体験の「そういう重くて複雑なものを、そのまま受け止めていけるだけの心の強さを作っていくことが、私は大切だと思う」と、体験談が「退屈で、飽きてしまった」のは、あたかも「そのまま受け止めていけるだけの心の強さ」をもっていなかったが故の反応として考えようとする。もちろん、そうではない。修学旅行生が「退屈で、飽きてしまった」のは、体験談が彼らの中に入っていかなかったからだ。要するに、体験談は彼らの前を通り過ぎるだけなのに、体験談を聞く振りを長時間強いられていたからである。体験談なんぞは自分たちにとって関係のない話であることを突きつけた点で、彼らはある意味で正直であった。

体験談は「伝わる」ことを信じて語る側と、体験談を聞けば戦争の残酷さがいくらか

でも生徒たちに「伝わる」ことを信じて企画した学校側の、体験談が「伝わる」ことを信じる思い込みに、「退屈で、飽きてしまった」感想は冷や水をぶっかけたのだ。おそらく沖縄を修学旅行先に選択すれば、「ひめゆり学徒の体験談」を聞くことがコースになっているのであろう。観光や遊びになってしまったら修学旅行の教育的意義が失われるので、教育的見地に立って積極的に体験談が取り入れられているのかもしれない。もしそうだとすれば、体験談を真面目に生徒たちに聞かせようとしたのであれば、学校は事前に沖縄戦についての勉強をし、理解を深める準備をした上で、体験談に臨ませる必要があった。それは体験談を聞こうとする側の最低限の態度であった。その態度で生徒たちが体験談に臨んでいたなら、「退屈で、飽きてしまった」などという感想が出る余地はなかったであろう。だがそのような態度で臨んだとしても、なお体験談は「伝わらない」ということを知ることが、肝要であったにちがいない。

体験談の語り手たちは、なんとしてでも沖縄戦の無惨さを若者たちに伝えなくてはならないという思いで、本土からやってくる修学旅行生に語り聞かせているのだろうが、痛々しい感じがしてならない。なぜなら、体験談は「伝わらない」からである。語って聞かせれば「伝わる」ほどの力は、言葉にはない。言葉が「伝わる」条件は、言葉の内にはなく、言葉の外でかたちづくらなくてはならないのだ。言葉が「伝わる」条件を欠損したまま、言葉で伝えようとする努力が眼前に押し込まれるとき、「退屈で、飽きてしまった」という感想がどうしてもやってこざるをえない。言葉で必死に伝えようとする相手の努力を感じて、義務としてでも聞かなくては申し訳ないという思いを押しつけるようにして、そのような感想が本音としてたえず覗かせてくる。

だが、もし言葉では伝えられないとすれば、言葉以外のなにによって伝えていけばよいのだろう。言葉では「伝わらない」としても、体験談の語り手は「退屈で、飽きてしまった」という本音を隠している本土からの修学旅行生に対して、言葉で向き合う以外の術をもたないのではないか。戦争の体験者の多くが高齢化して、語り手が少なくなってきた現状では尚更のこと、言葉で「伝わる」ことに賭けようとするのであろう。言葉で伝える以外の方法をもたないという態度で語りだす者にむかっては、やはりその言葉を「聞く」側が、どのようにして聞こうとすれば言葉が「伝わる」ように感じられるか、について考えなくてはならないのだ。発信者以上に受信者のほうがより多く問われていることに気づかなくてはならない。発信者の絶望を孤立させないためにも、受信者はより多くの問いを引き受けなくてはならないのだ。

先の対談で目取真俊が、「今、沖縄戦の研究として必要だと思うのは、沖縄にいた日本兵の証言をもっと記録することだと思います。去年、戦後60年企画として、沖縄戦に参加した米兵のインタビューを県紙が掲載しましたね。米兵に関してもそうです。中国での戦争に関しては、帰還兵で組織を作って中国で行った住民虐殺について積極的に証言している人もいます。それと同じように、沖縄における住民虐殺や「慰安所」につ

いても、日本兵の証言が非常に大切だと思いますが、極めて少ない。これは自らの行為を反省したうえで、記録として残しておこうという日本兵が戦後61年間ほとんどいなかったのかという問題でもあります。もちろん、それを口にすれば社会的に抹殺されるという恐怖があったかもしれない。でも61年経った今、証言できる人はいないのか？改めて、沖縄戦の研究者、マスコミ、私らのような立場の人間を含めて、証言を聴き取って残す努力が大切だと思う」と語っていることも、この問題にかかわってくるだろう。

この発言で気にかかるのは、「中国での戦争に関しては、帰還兵で組織を作って中国で行った住民虐殺について積極的に証言している人もいる」のに、沖縄戦について、日本兵の証言が「極めて少ない」のはなぜか、という疑問である。外地での戦争よりも、内地での戦争について証言するほうが抵抗が大きいということだろうか。地続きに感じられる分、証言に複雑さや屈折がより重たく申し掛かるのであろうか。同胞にかかわる戦争であるだけに、より一層生々しさが付きまってくるということだろうか。いや、そうではないと思う。「これは自らの行為を反省したうえで、記録として残しておこうという日本兵が戦後61年間ほとんどいなかったのかという問題」であるだろう。「61年経った今、証言できる人はいないのか？」つまり、死が近づいてくるなかで、自らの一生を振り返りながら、自分の場所で沖縄戦について語っておかなくてはならない、という生きかたの問題ではないのか。

証言はまず自分自身にむかって行われなくてはならないのであり、記録に残すための証言が問われているのではない。自分がこれまでどのように生きてきたのか、について真正面から振り返ろうとするなら、自分が日本兵として参加した沖縄戦について顔を背けることはできないだろう、という問題なのだ。そのような「日本兵が戦後61年間ほとんどいなかったのかという問題」として捉えられなければならない。裏返していえば、戦後61年間の日本はそのような日本兵を輩出していくような社会ではなかった、ということだ。個人も社会も61年前の沖縄戦を肝に銘じるよりも、忘れ去っていくように歩んできたということではなかったか。もちろん、忘れ去られたのは沖縄戦だけではない。心に刻み込まなくてはならないさまざまな出来事が忘れ去られるなかで、沖縄戦も忘れ去るように努めてきたということではないのか。

では、沖縄戦のどのような残酷さや無残さが忘れ去られてきたのか。対談の中で沖縄戦で起きた住民の「集団自決」のありように、次のように触れられている。

宮城 座間味では、行政上はナンバー2である村の助役が、戦時下では兵事主任というトップの立場になるんです。しかもこの人は防衛隊の隊長で、在郷軍人会の座間味分会の会長でもある。そのように軍と密着している人が、日常的に軍からの命令を伝令を使って住民に指示し、ついには「玉砕（＝「集団自決」）するから忠魂碑の前に集まれ」と呼びかけた。伝令の声を聞いたすべての人が、軍からの命令だと思い、ありったけの

食事を子ども達に食べさせ、晴れ着を着せてという行動に出るわけです。

目取真 島の人にもいろんな階層、年齢、立場の人がいて、それぞれ意識が違ってただろうし、同時にまた、生き残った人も沢山います。みながみな死に行った人ばかりではないと思うんです。晴れ着を着せてご飯を沢山食べさせてと聞けば、死を覚悟してたかのように見える。でもたとえば、『命どう宝 沖縄戦・痛恨の記憶』（創価学会青年平和会議編／レグルス文庫）という本には渡嘉敷で生き残った方の話があり、その人が鍬とか鉋を持っていたのはなぜかという、移動した場所でまた防空壕を掘らなきゃいけないと思ってたからだ。つまり死ぬためではなく、生きるために持っていった鍬や鉋が、肉親を殺す道具になってしまったわけです。

宮城 座間味でも、防空壕に避難した多くの人が縄を持っていたようです。それは移動中、木に縄をかけて山道を登るとか、荷物を運ぶときに使ったそうです。私の祖父はヒゲが濃い人で、防空壕でもカミソリを持っていた、結果的にそれで家族の首を切ることになりますが、最初から自決のために道具を持っていった人はいなかったと思います。

目取真 そういった細かいリアリティや事実を意図的に隠し、住民は軍の足手まといにならないために自ら命を絶ったのだという美化がやられていますね。軍の命令ではなかったという主張と表裏一体のものとして。

歴史の事実を突き止めようとか、沖縄戦の悲劇から教訓を学び取ろうとか、そういったこととは全く逆のベクトルで、自衛隊を強化し憲法を変えようという動きの中ですね、旧軍の美しい場面だけを描き、軍に協力して自ら死を選んだ美しい沖縄人というのを描き出そう……そういった意図が見え見えなわけです。こうした右派の力がこの十年間に広まっていて、沖縄戦の事実や沖縄人の声がヤマトゥに伝わっていかないという危機感を持つわけですよ。

宮城が語っている彼女の祖父については、対談の他の個所で、「私は『団塊』の世代ですが、この世代は戦争体験そのものはないけれど、二次体験のようなことはほとんどの人があると思うんです、特に沖縄の人は。たとえば私でしたら、祖母がいつも夫（祖父）を人殺し呼ばわりしていたので、私の祖父のイメージはいつもひとり寂しくサンシンを弾いていたという姿です。結局、戦争の被害者である住民が罪を全て背負い、お互いなじりあって生きていくという、そういう戦争の残忍さ、爪痕というものを、私たちの世代はもろに体験しているんです。」と語っているが、彼女の著書『母の遺したもの

沖縄・座間味島「集団自決」の新しい証言』の中の「カラサンシンを弾く祖父」で言及されているのを、仲里 効が『「カラサンシン」を聴く耳』（『世界』07. 7）で、次のように取りあげている。

《この書のなかで最も印象深いのは、惨劇の後、生き残った住民の休まることのない心の位相を描写したところである。「カラサンシンを弾く祖父」は、そんな生き残った者

たちの〈その後〉の時間を静かに語りかけていた。妻をはじめ息子一人と娘二人の喉をカミソリで切りつけ、最後に自らの喉を切り「自決」をはかるが、息子は即死、娘と妻と自身は瀕死の重傷を負いながらも奇跡的に生き残る。妻は喉を深く切りつけられたため一時は声を失い、その後空気の混じったかすれ声でどうにか話せるようになるが、そのかすれ声で息子を失った悲しみややり場のない怒りを夫に向け、夫を責め立てる日が続く。男は一切言い返すようなことはなかったという。

幼い頃のあるエピソードも紹介していた。それは祖父母の家の山羊小屋で、後ろ足に縛られ宙吊りにされた山羊を祖父が殺し、首から血が滴り落ちている光景を物陰から覗いている背後から、祖母が祖父に聞こえるようにかすれ声で「この人は首切り専門だから」と言い放つと、祖父の表情がみるみるうちに泣きだしそうで寂しげな面持ちにかわっていったということが語られていた。その祖母の「首切り専門」という言葉に、戦後生き残った家族が抱え込んだ修羅の履歴が母音のように鳴っていることを思い知らされる。

孫娘の前で妻から「首切り専門」といわれた男は、日が暮れるとサンシンを持ち出し、濡れ縁や波打ち際の護岸で鯉節製造工場からこぼれる光のなか、一人静かに琉球民謡を歌っていたという。はじめは決まって自作の歌だった。が、その祖父も自ら首を切ったとき声帯を傷つけ、歌えるほどの声が残っていなかった。そのため、島人には歌をとまなわない「カラサンシン弾いている」としか見えなかった。しかし家族だけには「あていん 喜ぶな／失ていん 泣くな／人ぬ 善し悪しや／後や 知らん（あっても喜ぶな／失っても泣くな／人にとって何が幸いなのか／後のことは誰も知らない）」という歌が聴こえていた。これは決して人生を諦観したり、世の無常を歌った歌ではない。諦観と見まがう存在のゼロ度から織り上げられてくる、生の声である。》

ここに書き記されていることは、「カラサンシンを弾く祖父」の胸の内や、その祖父をどうしても「首切り専門」という言葉で責めたてずにはおれない祖母の悲しみや、そのような家族の中で育ってきたことなどは、はたして言葉で「伝わる」のだろうか。戦争について映像やゲームでしか知らない若者たちに、「伝わる」のだろうか。いや、「伝わる」以前に若者たちに想像可能な世界なのだろうか。なるほど、言葉で祖父が《妻をはじめ息子一人と娘二人の喉をカミソリで切りつけ、最後に自らの喉を切り「自決」をはか》ったことや、息子だけが死に、生き残った祖母から祖父が「首切り専門」という言葉を投げつけられることは、事実のごく断片として言葉で「伝わる」ことはできるが、なぜそのような悲劇が起こったかは言葉では「伝わらない」。もちろん、修学旅行生に対して一口で伝えることはできないが、沖縄戦について書かれた本を何冊か読めば、その悲劇がどうして起こったのかはわかるようになるだろう。それでもいくらかは想像することができるようになったただけのことで、その悲劇を生きてしまった人々の地獄のような体験については、外からは誰にも「わからない」のである。

『生物と無生物のあいだ』の著者福岡伸一がエッセイ「生命とは何か？」(『UP』07.

8) で、伝えることができないエピソードについて記している。スキー技術の習得が遅々としながらも、スキーを続けていたが、《最初にスキーが「踏めた」とき、不思議な体感がした。身体がふわりと軽くなると同時に、加速をしっかりと受け止めつつ脚はしっかりとスキーをとらえていた。ああ、こういうことなのだ。それまで散々、スキーを踏め、スキーを踏めと言われ続けたことがようやく理解できた瞬間だった。》スキースクールでインストラクターから指導されながら、なぜ指導通りにできなかったか、についてこう考える。

《スキーが抜群にうまいインストラクターたちは、しかし、しばしばそのうまさを伝えることができなかった。彼らはスキー技術のポイントを整理し、そこに定義や意味を付与することはできる。しかし私はそれを受取り、それを身体で実現することができない。しばしばインストラクターはいらだった。こんなに簡単なことが、こんなにシンプルなことがどうしてできないのかと。こうですよ、こう。そういつて彼らは華麗に雪面を滑り降りてみせた。

実は彼らは忘れているのだ。正確に言えば憶えた経験すらないのかもしれない。それほどスキーの滑走感、ターン感は彼らにとって生得的なものなのだ。小さい頃から、粉雪の中を舞い、眉や唇が凍りつくのもものともせず、風と一体になってきた彼らにとって、雪の上をすべる感覚は、母語が自動的に私たちの内部に流れ込んで定着するように、全く自然に身についたものなのだ。伝えることができるのは、私たちが記憶していることだけである。自分が理解したプロセス自体を憶えていることだけである。》

スポーツは結局のところ、言葉でいくら説明されようとも、身体で憶えるしかないということになるが、彼はスキーを続けていたから、インストラクターの指導どおり、やがて《スキーが「踏めた」》。伝わったのである。もちろん、彼がスキーをやめていれば、伝わらないままであった。つまり、スキーを続けていることを前提として伝わったのだ。沖縄戦を伝えることは、スキーを伝えることとは異なる。だがスキーを伝えることですら、スキーを続けることを共有せずには成り立たなかった。沖縄戦を伝えることもしたがって、なにかを共有せずには成り立たない筈である。同じ人間であり、同じ日本人だから、「伝わる」ということはありえない。なにかを共有するなかでしか、「伝わらない」のである。共有していても、すぐには「伝わらない」し、言葉ではなく、身体で憶えるしかないことが記されている。

ここでもっと重要なことは、なぜ「伝わらない」かが説明されていることである。身体で憶えるようになったときにしか「伝わらない」のに、指導する側はどうして言葉で「伝わる」ように思ってしまうのか。身体で《憶えた経験すらないのかもしれない》し、あるいは、身体で憶えた経験は忘れていなくても、身体で憶えるようになったプロセス自体を忘れているからだ。すぐにできた筈はないのに、できてしまえばすぐにできたように思ってしまうのである。記憶の偽造が起こるのだ。ここでの問題は言葉で伝えよう

とすることと、身体で憶えようとすることとのズレとして生じているが、伝える側が強調することと、伝えられる側が受けとめることとのズレとしても拡大されてくる。

沖縄戦の体験談が「伝わらない」のは、双方の間に共有すべきものがなにもないだけでなく、語り手が伝えたいことを強調することのなかに聞き手は不在しているからだ。

《伝えることができるのは、私たちが記憶していることだけである》とすれば、記憶していないことは伝えられないことになり、沖縄戦を戦後の若者に語って聞かせること自体が不可能なのである。二度と沖縄戦の悲劇を繰り返さないことを願ってであろうとも、体験談が「伝わる」ことを前提にしているかぎり、戦後の若者には「伝わらない」ことを思い知らなければならない。聞く側の若者たちから手を差し出されているならまだしも、語り手側から差し出されている手を受けとめるものは若者たちにはなにもない。その「なにもない」ことに向き合わないかぎり、体験談は立往生しつづけるしかないのだ。

先の「カラサンシンを弾く祖父」について、仲里 効はこう続ける。

《一人夜の海辺で、声のない「カラサンシン」が含意するものは、生と死、殺された者と殺した者がほとんど同一位相にあり、死んだ者は報われないが、生き残った者もまた修羅をかかえていた、ということである。「集団自決」の「証言」をほとんど崩壊させかねない〈存在のゼロ度〉のような場所から、だが、「集団自決」の核心が静かに浮かび上がってくるのを知らされるはずである。

あるいはこういってもいいだろう。すなわち、「証言」そのものを、〈ゼロ度〉にまで解体しながら、なおそこに言葉が生まれてくる可能なる中心を示唆するものとしてである。》
「カラサンシンを弾く祖父」は、沖縄戦のなかで起こった無数の「カラサンシン」の一つであり、それ故に沖縄戦の惨劇を映し出す象徴でもある。同時に、沖縄では沖縄戦が戦後も続いていることを浮かび上がらせている。語り手は本土からやってくる修学旅行生に、観光客にどうしても沖縄戦を語り聞かせなくてはならないのか。聞き手が自分に関係のない、遠い出来事のように振る舞っているとしても、そんな彼らに語り聞かせなくてはならないのだろうか。そう、語り聞かせなくてはならないというように、語り手は「伝わらない」ことの絶望を越えて彼らに対座している印象を受ける。聞き手はどこにもいないのに、語り手だけがくっきりと浮かび上がってくる。そこに日本における沖縄の孤立した位置が鮮明に折り重なってくる。

語り手のそのような不動にもみえるスタンスは、一体どこからやってくるのか。語り手は本土からやってくる修学旅行生や観光客に向き合いながら、日本そのものを見据えているのが伝わってくる。日本という国家を問いながら、語り手はその日本からなんの疑念もなく、無邪気に観光と癒しの島に押し寄せてくる人々に問いかけているのである。では一体、沖縄の人たちはなにを語り、問いかけているのだろうか。日本で唯一本土戦となった沖縄の悲劇をいつまでも忘れないでほしい、と訴えているだけなのであるか。本土の人々のあまりもの冷淡さと無関心に、抗議の意思を表明しているだけなのか。沖

繩戦の後遺症に苦しみつづけている沖縄にもっと理解のまなざしを注いでほしい、と願っているだけなのであろうか。いや、そうではない。語り手は自分たち沖縄のために問うているのではなく、本土の人々が本当は自分たちを問わなくてはならないのに、問わないから、その〈自問のバリケード〉に気づかせるようにして、気づかせなくてはならない触媒として、彼らの前に立ちつづけているのがみえてくる。

語り手にとっては、「集団自決」の軍命令はなく、米軍の総攻撃に平常心を失った沖縄人が恐怖に駆られて「集団自決」を惹き起こしたとして、日本帝国軍隊の「集団自決」への関与を否定する論理と、過去の沖縄戦に無関係であるとするいまの本土の人々の論理とは全く同じであった。戦時中の「集団自決」への軍関与を否定する論理が、戦後にいまでも引き続けている沖縄戦への無関係を主張する論理としていまでも引き続けているのだ。裏返せば、前者の論理に対するたたかいは、後者の論理に対するたたかいを必然的に生みだし、後者のたたかいにおいて前者のたたかいは持続されているのである。実際、前者の論理は「集団自決」に対する日本軍の無関心を示すものであったし、後者の論理は現在の沖縄の現状への関与を否定するものであったと把握される。

「集団自決」への軍関与を否定する主張は、「隊長命令はなかった」とする証言に基づいており、その論理を突き崩すために、直接的に「隊長命令」があろうとなかろうと、「隊長命令」として受けとめざるをえない状況に住民が置かれていたが故に、「集団自決」へと彼らは自分たちを追い込んでしまったという論理が提出されている。先の対談では、「議論が『誰の命令だったか』というレベルでとどまっている限り、『隊長は直接命令してない』ということであれば、隊長には全く責任がないということになるのか？

逆に『隊長が命令した』ということであれば、隊長ひとりの責任にして、天皇を頂点とする軍国主義国家、駐留していた日本軍の責任は不問にしていいのか？ どちらもおかしい話」（宮城）であるという、その理不尽さに目取真俊はこう切り込む。

「……隊長が直接住民に、死になさいと命令しなかったとしても、手榴弾を配ったりとか、住民が自決するような方向へ導く指示や訓示というのはずっと行われてきているわけです。座間味島でも渡嘉敷島でも、機密性の高い部隊が配置され、住民が半年以上も軍とともに暮らしていて、部隊の配置や人員、物資の蓄積場所まで知っている。彼らが捕虜になってしまうと米軍に情報が漏れるから、捕虜にさせちゃいけないというのが軍の論理だと思うわけです。また、ただでさえ量の足りない武器弾薬を住民に与える場合には、それでもって住民が米軍と戦うということは考えられないわけで、自らの命を絶たせるために与えたということは明らかだと思うんです。そういったものをトータルに考えれば、軍の命令や強制があったことは明らかなのに、あえて問題を隊長の直接的な命令があったか否かに矮小化して、それでもって軍の命令までをも否定しよう、そうして日本軍の名誉回復をはかろうという、その意図が怖いんです。それは明らかに今の政治状況とも関わってくるわけです。」

戦前、戦時中の日本は「国のために死ぬる国家」の典型であり、戦争は命を捨ててたかうものであって、生きるためにたかうものではなかった。死ぬことばかりを考えている戦時下で戦闘が発生すれば、「隊長命令」があろうとなかろうと、軍隊と一体化した生活のなかにある住民が、「集団自決」へと死に急ぐことになるのは必至であった。軍が普段から非戦闘員である住民に対して、自分たちは兵士だから戦死は当然だが、あなたたちは戦闘には無関係だから自決などせずに生き抜きなさい、と教えこんでいたのであれば、「隊長命令」のない「集団自決」へと住民が突っ走ったことに国は軍の関与を否定するのともわかるが、そうでなければ、「隊長命令」がなくても既定のコースを突き進むのは明白であった。「戦争中だって“自決しないし捕虜にもならない。逃げ続ける”とか、“自分から捕虜になって生き延びる”とか、いろんな選択肢があった」のに、「捕虜になって殺されるか、「自決」するか」という二者択一に追い込まれていったことが「集団自決」のかたちをとって帰結せざるをえなかったのだ。

仲里 効もまた先のエッセイで、次のように述べている。

《小さな島空間に軍隊が入り込むことによって、島民と島の共同性がいかに変容と緊張をこうむり、軍隊の論理にどのように呑み込まれていくのか——。このことを凝縮した形で実証している。例えば、それまで陣地構築と漁労班に従事していた16歳から45歳までの男子は防衛隊として編制されたのをはじめ、女子青年団は軍の炊事班、将校集会所、経理室などに配属され、漁船も船員ごと軍の指揮に置かれ、那覇との渡航も許可性となり、また村役場や青年会館などの公共施設は軍の作戦本部となった。秘密基地ということもあって、住民は日本軍の厳しい統制と監視下におかれたのである。つまりヒトやモノの一切が軍の統制下に置かれ、軍官民一体となった根こそぎの総動員体制ができあがる。「軍命」とはまぎれもない、こうした構造の産物であるといっても間違いではないだろう。》

しかも、隣の渡嘉敷島も含めて座間味島では、《沖縄戦において最初に集団自決で住民の死者を出したのとは対照的に、軍隊が組織的に最後まで残った》。住民は玉砕したのに、日本軍は玉砕せずに生き残ったのだ。これが「集団自決」の実相であった。沖縄にとって問題はしたがって、《小さな島空間に軍隊が入り込むことによって、島民と島の共同性が（…）変容と緊張をこうむり、軍隊の論理に（…）呑み込まれていく》ところにあった。目取真俊の言いかたでは、軍—国家の論理を内面化して生きてしまったところに、「集団自決」の悲劇があった。日本軍の兵士でも軍の論理の内面化を徹底しないところで玉砕を免れたのに対して、住民のほうは「集団自決」のかたちをとって、軍の論理の内面化を徹底してしまっただけだ。このことは沖縄の住民にとって、軍の論理に取って代わられるほど、自分たちの生活の論理が内面化されてこなかったことを物語っているにちがいがなかった。

しかしながら、この問題は沖縄だけに問われていることなのだろうか。沖縄戦に直面

した沖縄でのみ「集団自決」が起こったようにみえているが、もし沖縄戦に続いて本土戦が起こっていれば、日本中の至る所で「集団自決」が惹き起こされていなかっただろうか。沖縄の人々と同様に本土の人々もまた、軍の論理を徹底的に内面化した生きかたを突っ走らなかつただろうか。軍の論理の内面化を押しとどめるほどに自分たちの生活論理の内面化を徹底して、本土の人々は生きていだろうか。そうは思われない。沖縄戦で露出した「集団自決」の悲劇は、戦争が本土にまで拡大されたときに、本土で必ず惹き起こされたにちがいない出来事であったと受けとめられる。本土戦が回避されたからこそ、本土での「集団自決」も回避されたのである。沖縄という閉鎖的な共同体であったからこそ、沖縄にのみ起こった特殊な惨劇であったのではない。日本という閉鎖的な共同体で起こりえた特殊な惨劇であったからこそ、沖縄戦で「集団自決」は起こりえたのである。

起こりえたかもしれない本土戦における「集団自決」の惨劇として受けとめなければ、沖縄戦における「集団自決」は沖縄でのみ起こりえた特殊な惨劇にほかならなかつた。沖縄戦における「集団自決」を未然に防げた本土戦にまで拡大して受け止めるとき、その惨劇は沖縄の地を突き抜けて、日本で惹き起こされた「集団自決」としての意味をもってくにちがいない。体験談の語り手は沖縄戦の悲劇は自分たちの問題であると同時に、あなたがた本土の人たちの問題であることを、修学旅行生や観光客にむかって問いかけていた筈だ。対談の最後に、「私がいま感じている課題としては、やはり、地元の子どもたちに肉親の体験をどう伝えていくかということです。確かに身内には話せないという人もたくさんいますが、第三者には証言していますし、住民の体験記はこれまでたくさん書かれていますので、学校や地域での取り組み次第なんですね。それが実現することで、証言の“再生産”が可能になると思っています。」(宮城)と語られているように、沖縄の地においても沖縄戦を知らない戦後世代に「どう伝えていくか」という課題が焦眉となっている。

沖縄戦を過去の出来事として語るのではなく、現在進行形としていままに起こっている出来事として捉える視点は、沖縄戦を唯一本土決戦として体験してきた戦時中の沖縄が、戦後においても唯一の島として米軍基地化しているという問題にどうしても向かわなくてはならない。戦時中の「集団自決」への軍関与を否定する戦後日本は、戦後の沖縄に対しても米軍基地化をおしすすめることによって、別のかたちの「集団自決」が惹き起こされかねない現実を生みだしているのである。つまり、戦時中は沖縄を本土から切り離した戦争に巻き込み、戦後も米軍基地化によって沖縄を本土から切り離した戦争に巻き込む要因をつくりだしているのだ。「集団自決」への軍関与を否定する論理がその惨劇を排除することによって、米軍基地化を正当化する論理につながっているのが感じられる。この点で沖縄でかつて起こった「集団自決」は、今後も起こるかもしれない未来の惨劇としての意味をたえず帯びているといつてよい。2007年8月26日記